

高齢者に発症した皮膚腺病の1例

浦野 芳夫¹⁾ 松田 里恵¹⁾ 齋藤 聖子¹⁾ 山下 理子²⁾
 城野 良三³⁾ 清水 公博⁴⁾ 榊田 勝仁⁴⁾

- 1) 徳島赤十字病院 皮膚科
 2) 徳島赤十字病院 検査部
 3) 徳島赤十字病院 放射線科
 4) 徳島ロイヤル病院 小松島市

要旨

83歳，女性．認知症があり介護施設に入所中であった．初診の3日前に右鎖骨上窩の皮下腫瘍を職員に発見され受診した．3週間後に自壊し膿汁より結核菌が培養された．CTにて右鎖骨部と縦隔にリンパ節腫大を認めた．肺には異常を認めなかった．イソニアジド，リファンピシン，エタンブトールの3剤併用にて潰瘍は癒着化した．皮膚腺病はまれではあるが忘れてはならない疾患の1つで特に高齢者では注意が必要である．

キーワード：皮膚結核，リンパ節結核，抗結核剤

はじめに

2007年の結核年報速報によると結核罹患率（人口10万人当たり）は19.8人で，そのうち70歳代では45.3人，80歳以上では90.5人と高齢者では高くなっている．このように結核は「過去の感染症」ではなく今なお重要な感染症であり，特に高齢者では注意が必要である．新規登録結核患者の約1/5は骨，リンパ節，尿路，皮膚など肺外結核患者が占めている．皮膚の結核は病巣部から結核菌が容易に検出される真正結核と結核アレルギーで発症し病巣部からは結核菌を容易には分離できない結核疹に分けられる．皮膚腺病はリンパ節，筋，関節，骨などの深部臓器の結核病巣からあるいは皮下の冷膿瘍を介して連続性に皮膚に波及して生じる真正結核の1つである¹⁾．今回我々は高齢者に発症した典型的な皮膚腺病を経験したので報告する．

症 例

患 者：83歳，女性
 初 診：2007年6月14日
 主 訴：右鎖骨上窩の皮下腫瘍
 既往歴：高血圧症，脳出血，認知症

現病歴：初診の3日前に入所中の介護施設の職員に右鎖骨上窩の皮下腫瘍を発見され当科を受診した．

初診時現症：発熱なし．右鎖骨上窩に可動性のない4.5×2.5cmの軽度圧痛を伴う皮下硬結があり，表面には発赤と軽度熱感を認めた（図1）．頸部，腋窩リンパ節は触知しなかった．

血液検査結果（初診時）：赤血球数341万/ μ l，ヘモグロビン10.1g/dl，白血球数5,410/ μ l（好中球71.4%，リンパ球22.4%，単球5.2%，好酸球0.6%，好塩基球



図1 初診時にみられた右鎖骨上窩の硬結を伴う発赤

0.4%), 血小板21.9万/ μ l, 肝機能および腎機能は異常なし, CRP1.70mg/dl, 赤沈130mm/1時間

CT所見: 頸部の右側下部に2.3cm程度までのmassが多発してみられ造影CTではリング状に造影効果が見られた(図2). また縦隔にも同様の変化を認めた. 肺野に異常はなかった.

ツベルクリン反応: 15mm \times 15mm/40mm \times 45mm

初診後の経過: 化膿性リンパ節炎やリンパ節結核を考え皮下結節の組織検査を勧めたが同意が得られなかったため抗生剤投与で経過をみた. 3週間後の受診時には鎖骨上部が自壊し排膿がみられた(図3).

皮膚病理組織所見(瘻孔近くの紅斑部): 真皮浅層から深層の血管周囲に好中球, リンパ球, 組織球からなる密な炎症細胞浸潤がみられた. また好中球はびまん性に浸潤しており一部では膿瘍形成がみられた(図4). 類上皮肉芽腫はみられなかった. 抗酸菌染色に

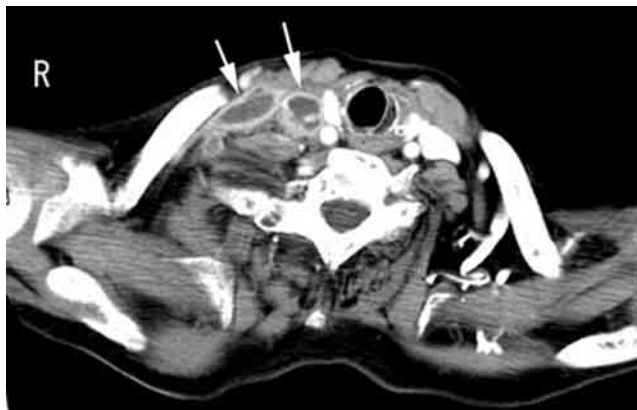


図2 造影CT: 右頸部下部のリング状に造影効果のある多発性の結節(矢印)



図3 初診から3週間後の再診時にみられた瘻孔

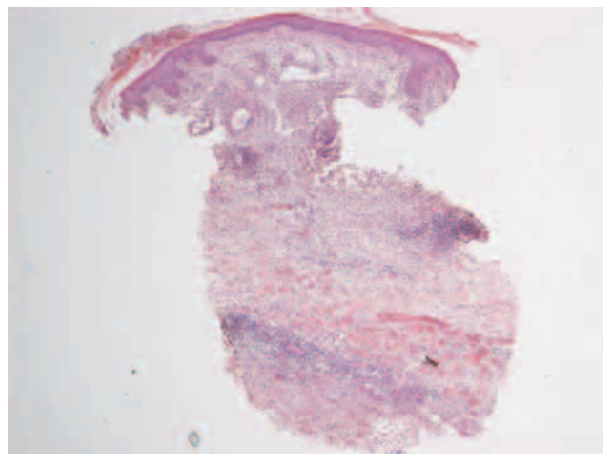


図4 真皮浅層から深層の好中球, リンパ球, 組織球からなる密な炎症細胞浸潤(HE染色)

て陽性桿菌を認めた.

微生物学的検査(膿汁): 一般細菌培養, 真菌培養とともに陰性. 塗抹標本の抗酸菌染色では菌を認めなかったが結核菌PCRが陽性, 小川培地での抗酸菌培養も陽性であった.

治療と経過: 以上の結果から皮膚腺病と診断しイソニアジド200mg/日, リファンピシン300mg/日, 塩酸エタンブトール750mg/日を開始した. 徐々に排膿は減少し潰瘍も縮小してきた. 治療開始2ヶ月後に行った結核菌PCRは陰性であった. 3ヶ月後には瘻孔は閉鎖した. 治療は6ヶ月間行い中止した. 中止後約1年経過しているが再燃はみられていない.

考 察

結核の新登録患者数と罹患率は1950年代後半以降減少を続けてきた. しかし1997年, 1998年と2年連続前年を上回ったため1999年に厚生省が結核緊急事態宣言を発表し様々な結核対策がなされた. その効果によってか2000年以降は再び新登録患者数と罹患率は減少を続けている. 皮膚結核に関しては1997年以前には肺外結核として一括統計されていたためその全国的な動向を知ることはできなかった. 1998年以降は単独項目として全国集計されており, それによるとこの10年間毎年100人前後の新登録患者あり明らかな減少傾向はみられず皮膚結核はそれほど減少していないことがわかる(表1)^{2), 3)}.

皮膚病巣から結核菌を分離できる真正皮膚結核は感

表1 全国の結核の新規登録患者数^{2), 3)}

年	全結核患者(人)	肺結核患者(人)	皮膚結核患者(人)
1998年	41,033	33,981	100
1999年	43,818	36,190	94
2000年	39,384	32,338	123
2001年	35,489	28,868	104
2002年	32,828	26,472	100
2003年	31,638	25,478	87
2004年	29,736	23,829	95
2005年	28,319	22,655	98
2006年	26,384	20,856	109
2007年	25,311	20,264	92

染の機序，臨床の特徴から皮膚初感染徴候，皮膚粟粒結核，潰瘍性皮膚結核，皮膚腺病，尋常性狼瘡，皮膚疣状結核などに分類されている¹⁾。我が国においては前者3疾患は極めてまれで調べた限りこの10年間に報告は見あたらない。

皮膚腺病は医学中央雑誌を調べたところ2003年以降に70例の報告がある。そのうち11例がBCG接種に関連したものでそれを除いた59例中（4名は年齢，性別が不明）36例が60歳以上であった。この36名のなかで70歳以上が27名に達し高齢者での発症が多い。また性別では男性25名，女性30名でやや女性に多かった。皮膚腺病の好発部位は自験例のように頸部から鎖骨部といわれている¹⁾。我々の調べた詳細の明らかな上記の皮膚腺病55例中42例で罹患部位が頸部から鎖骨部でありやはり頸部から鎖骨部が好発部位であることに変わりはない。次いで腋窩部，胸部となっている。しかし大腿⁴⁾や手指^{5), 6)}に生じた例も報告されており，稀ではあるがどの部位にも起こりうることを認識する必要がある。また55例中2例^{7), 8)}は在日外国人に発症したもので社会情勢を反映しているものと思われる。

尋常性狼瘡の報告は2003年以降では21例で皮膚腺病より少ないがこのうち16例が60歳以上を占め，70歳以上は8例でやはり高齢者に多い点は同じである⁹⁾。男女別では男性6例，女性15例と女性に多かった。

皮膚疣状結核は最近ではさらに少なく医学中央雑誌で検索したところこの10年間では12例の報告のみであった。この12例中7例は60歳未満で皮膚腺病，尋常性狼瘡に比べて若年での発症が多い点が異なっている。さらに男女別では男性11例，女性1例と男性に圧

倒的に多いことも皮膚腺病，尋常性狼瘡との相違点である。なぜ皮膚疣状結核がより若年の男性に好発するのは定かではないが，この疾患が結核免疫のある個体に接触感染して発症することと関連があるのかもしれない。

真正皮膚結核は周辺への感染を予防する観点からも早期の診断，治療が重要である。しかし遭遇する機会が少ないため疑われず確定診断までに時間を要することがある。また疑いながらも確定診断に至るまでに数ヶ月を要することもあり皮膚科医として常に皮膚結核を念頭に置いて日常診療を行うことが大切である。

まとめ

83歳女性の右鎖骨上窩に生じた皮膚腺病を報告した。皮膚腺病を含めた真正皮膚結核は頻繁に経験する疾患ではないが，診断，治療の遅れは周辺に感染を拡大させる可能性があることを皮膚科医として認識する必要がある。

本論文の要旨は第128回日本皮膚科学会徳島地方会で発表した。

文 献

- 1) 石井則久，佐々木津：皮膚結核（症）。玉置邦彦，飯塚 一，清水 宏，他編「最新皮膚科学大系」，14巻，1版，p130-142，中山書店，東京，2003
- 2) 財団法人結核予防会編：結核の統計2007，p54
- 3) 新見やよい，落合廣武，本田光芳，他：日本医科大学付属病院皮膚科における60年間の皮膚結核の統計。日皮会誌 118：1095-1100，2008
- 4) 新垣 肇，上里 博，武居公子，他：Nested PCR法による真性皮膚結核の診断。西日皮膚 67：42-48，2005
- 5) 高安 進，本郷哲央，直野 敬：皮膚腺病の2例。皮膚臨床 48：661-665，2006
- 6) 門田匡史，鬼頭昭彦，森田和政，他：中手骨結核より波及した皮膚腺病の1例。皮膚臨床 45：731-734，2003
- 7) 荒井美奈子，玉木 毅：皮膚腺病の1例。日皮会誌 114：1673，2004
- 8) 浅井かなこ，日置加奈，米田和史，他：皮膚腺病の1例。西日皮膚 69：332，2007

An Elderly Case of Scrofuloderma

Yoshio URANO¹⁾, Rie MATSUDA¹⁾, Seiko SAITO¹⁾, Michiko YAMASHITA²⁾,
Ryozo SHIRONO³⁾, Kimihiro SHIMIZU⁴⁾, Katsuhito MASUDA⁴⁾

1) Division of Dermatology, Tokushima Red Cross Hospital

2) Division of Clinical Laboratory, Tokushima Red Cross Hospital

3) Division of Radiology, Tokushima Red Cross Hospital

4) Tokushima Royal Hospital, Komatsushima City

An 83-year-old woman with dementia was staying in a care facility. Three days before she was first examined at our hospital, a subcutaneous mass was detected in the right supraclavicular cavity by a facility staff member and she visited our hospital. Three weeks later the mass collapsed spontaneously. The pus collected was cultured to check for tubercle bacillus. CT scans revealed lymph node swelling of the right clavicular area and mediastinum. No abnormality was seen in the lungs. The ulcer became scarred following three drug-combined therapy (isoniazid, rifampicin and ethambutol). Although scrofuloderma is a rare disease, it is one of the diseases that need to be borne in mind, particularly when dealing with elderly patients.

Key words: skin tuberculosis, lymphoid tuberculosis, antituberculosis drugs

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 14:66-69, 2009
